

早稲田大学博士論文(概要)		
	学位記	文科省報告
2011	5711	甲 3389

## アジア太平洋研究科 博士学位論文要旨

### 農村景観の動態的保全による地域の資源形成とその活用

—中国広西省龍脊棚田地域を事例に—

4008S305-1 Masumi Kikuchi 菊池真純

主指導教員 山岡道男教授

**Keywords:** 農村景観 1, 資源 2, 動態的保全 3, 中国農村 4

社会や市場の変化、また、人々の価値観や需要の変化が存在するなかで、資源とされるものも変化する。中国の中山間地農村において、地域に既存の資源を生かした発展を目指す場合、これまで、資源として認識されることがなかった農村景観が最大の資源であると考えられる。拙論の課題は、こうした変化のなかで人々が農村景観を資源化してきた過程を示し、その過程のなかで、農村景観を動態的に保存することが可能であるか、また、農村景観に対する人々の価値観や管理の方法、資源分配にどのような変化が生まれたかを明らかにすることである。さらに、こうした農村地域の質的変化が、現代中国においていかなる意味を持ち、また持続可能な発展を目指すうえでの提言を行った。

農村景観に注目する背景には、地域特有の自然・文化・人間といった総体的表現が景観であると考えられ、換言するならば、それは自然に対するその地域の人々の作法の表れであり、大小様々な変化を敏感に直接反映するという認識がある。自然と人間の協働によって形成される農村景観を読み解くことは、自然と人間の関わりを読み解くことといえる。

以下は、論文全体の構成とその内容である。

第1章(序章)では、上記に示したように研究背景・問題意識の所在・目的と研究方法を論じた。

第2章(先行研究)では、景観・農村景観・文化的農村景観の保全・資源としての農村景観・景観を形成する農村経営全体のなかでの資源分配に関して、先行研究を整理した。景観生態学を中心に農村景観を議論・分析した。さらに、農村景観を資源として捉えるために、資源論を用い、農村景観の資源化の過程を示した。それを受けて、資源である農村景観の再形成・維持・管理を考察するために、コモンズ論を用いて論じた。

第3章(現地調査概要)では、調査地である中国広西省龍脊棚田地域の概要・龍脊棚田地域の価値と保存意義・調査内容を示した。当該地域には、1996年から旅行業が開始し、発展が進む平安村と2003年から旅行業が始まり、発展初期段階の大寨村2つの村が存在する。この地域を選出した背景には、まず、独特な農村景観を有する地域であり、2つめに、近年、旅行業が進出するまでは、ほぼ完全に近い自給自足の生活が行われてきたこと、3つめに、豊かな自然環境のなかで人間生活を継続しており、現時点において、今後もその可能性がある地域であるという理由が挙げられるが、最大の意義は、旅行業の発展によって、すでに農村景観が資源として成立している平安村と、それを試みている最中の大寨村を時系列的に比較できる点にあり、ここから農村景観の資源化の過程をみることが出来る点にある。

第4章(現地調査結果)では、2つの村の代表である主任と書記、長老に対する調査結果を示した。現地調査では、村全体の①経済状況、②資源分配方法、③農業、④旅行業、⑤将来の展望について、インタビューを行った。長老に対しては、出生から現在までの個人史をまとめた。2つの村で、特に、差異が明確化された点は、旅行業開始時期とそれに伴う経済収入・政府、旅行会社と村の関係の良し悪し・耕作放棄地面積と棚田維持の努力・村内での農業と旅行業の産業構造に対する考え方・棚田耕作の意義・目的に関する点であった。

第5章(調査結果の分析)では、2つの村の地域住民各20名ずつ、合計40名と国内と国外からの旅行者10名ずつ、合計20名への意識調査の結果を示し、分析を行った。地域住民の被質問者の選出は、村幹部のインタビューから、村内の経済水準層を基準に行った。その内

容は、過去・現在・将来という時間軸のなかでの資源分配・農業・旅行業・農村景観への感覚と意識に関するものである。

第6章(政策提言)では、調査によって、農村景観のあり方が変化した今日においても、農村景観の動態的保存は可能であることが明らかとなったが、同時に、そこでの課題も明らかとなったことを受け、龍脊棚田地域におけるミクロレベルでの政策提言を行った。まず、①農村景観資源を所得政策の核として積極的に活用し、農村景観を最大の目的とした農業形態を肯定的に捉えること、②他産業での農村景観の維持が必要であるということを示し、地域住民の兼業化の奨励を述べ、また農村地域では、農業を本業と位置づけ、旅行業を副業と位置づけるべきであること、③農村景観を形成する共同体のあり方は、今後、農村景観を形成・維持・管理する共同体の構成員は、地域内部に留まらず、地域外からの協力・支援が必要であり、さらに広域化・多様化した動態的な共同体の再編成が必要であること、④急速な商業化と破壊的開発を行うのではなく、市場経済への緩やかな移行を目指すべきであること、⑤地域の弱点を強みに転換した発展の可能性があることを提言した。

第7章(結論)では、さらにマクロ的な視点で、龍脊棚田地域の質的変化が現代中国社会においていかなる意味を持つか、また農村景観を地域最大の資源として保全・活用する持続可能な発展について論じた。

農村景観が資源として成り立つ農村には、自然環境の保全がなされ、そのなかで経済的安定があると同時に、社会的・文化的安定がある。社会の変化のなかで、市場経済が龍脊棚田地域にも押し寄せている今日、非経済的要素を多く含んで形成されている農村景観資源を保全・活用するためには、地域住民のみの努力ではなく、外部社会の多様なアクターとの協力・運動が必要である。

近年、中国では、都市と農村の貧富の格差・近代化の格差である三農問題が顕著であり、その解決・緩和はさらに難しくなっている。拙論において、龍脊棚田地域の現状とこれからの発展のあり方をこれまで論じてきたが、農村景観を資源とした地域内でのグリーンツーリズムを発展形態とすることは、新たな三農問題緩和の一端を担うことができると考えられる。

大寨村の発展形態と今後村が目指す方向性は、現代中国における農村地域での旅行業による発展モデルとして、他の地域に模範的モデルを示すことができると考えられる。大寨村における今後の発展は、地域住民自身が精神的に幸福感を得られる生活の選択と実現をし、政府や旅行者といった他者のためではなく、自分たちのために民族文化や棚田耕作の継承を行っていく必要がある。そのうえで、当該地域の農村経営に共感を持ち、地域の全てを包括した農村景観を評価する人々が、地域に集まればよいのである。地域住民が地域での自然環境と調和した生活・慣れ親しんだ民族文化のなかでの家族との生活といった自身が選択した生活方式を実現・確立するなかで、グリーンツーリズムという発展のための一手段を確立させていくことが、農村景観の動態的保全と活用による地域の持続可能な発展となり得る。

#### 【主要参考文献】

- 熊谷宏・堀口健治・進士五十八・倉内宗一・原剛(2009)『わが国 農業・農村の再起』財団法人農林統計協会  
進士五十八(1994)『ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法』学芸出版  
俞孔堅(1998)『景観：文化、生態与感知』科学出版社